

on the Dickens stage.¹⁸⁾

Dickens は常に徳の力を信じている。しかし、作者の徳に対する信頼は悪人にとっては重い足かせとなって十分に力を発揮しているのではあるが、善人にとって、特に後期の小説に出てくる善人にとっては、人間の心の奥に潜む解放されたい自己の欲求を生む原因となるのである。またときには自己を守り、生き延びるための一つの逃げ道ともなることがある。ともすればDickens の作品は徳という壁面からのみ読まれがちであるけれども、読者である我々は広く高いところに眼を置いて、徳という壁とそれに囲まれた人間の心理の微妙な動きとを同時にながめることにより、Dickens の深く厳しい人生観を探ることができるように思える。Jarndyce と Carton と Wrayburn の生き方は、その意味で我々にさまざまな感慨を残してくれるのである。

注

- 1) Henry James, "The Limitation of Dickens," Review of *Our Mutual Friend*, *Nation*, vol. I (21 December 1865) from *Charles Dickens* ed. by Stephen Wall (Penguin Books, Ltd), p.164.
- 2) George Orwell: *Critical Essays* (London, 1946) p. 5.
- 3) Humphry House: *The Dickens World* (Oxford, 1942) p. 39.
- 4) Walter Houghton: *The Victorian Frame of Mind 1830-1870* (Yale University Press, 1957) p. 275.
- 5) Dickens の描く good people は子供のイメージで語られることが多い。A. E. Dyson は *Inimitable Dickens* (Macmillan and Co.Ltd., 1970) で "Certain kinds of virtue can have a touch of the childish as well as the childlike" と述べている。
- 6) Lauriat Lane, "Introduction: Dickens and Criticism", in *The Dickens Critics* (Cornell University Press, 1961) p. 8.
- 7) F. R. and Q. D. Leavis, *Dickens the Novelist*, (Chatto and Windus, 1970) p. 154.
- 8) Angus Wilson, p. 211.
- 9) K. J. Fielding, *Charles Dickens* (Longmans, 1958) p. 202.
- 10) *A Tale of Two Cities* の Preface (1859) で Dickens 自身 Wilkie Collins の *The Frozen Deep* を演じているときに、この話の大筋ができたと書いている。また K. J. Fielding なども、Dickens の当時の心理状態や Ellen Ternan との出会いがこのような愛のテーマに対する Dickens の興味を深めることになったことに触れている。
- 11) John Gross, "A Tale of Two Cities," from *Dickens and the Twentieth Century*, ed. by John Gross and Gabriel Pearson (London, 1962) P. 187.
- 12) *ibid.*, p. 191.
- 13) Walter Houghton, p. 277.
- 14) Angus Wilson, "The Heroes and Heroines of Dickens," from *Dickens and the Twentieth Century*, p.8.
- 15) Hillis Miller, *Charles Dickens the World of His Novels*. (Harvard University Press, 1959) p. 316.
- 16) John Lucas, *The Melancholy Man* (Methuen & Co. Ltd., 1970) p. 328. で Lucas は Henry James に反論している。
- 17) Walter Houghton, p. 282.
- 18) Barbara Hardy: *Dickens, the Later Novels*, p. 39.

(第一外国語 講師)

諏訪間 裕子

and in spite of both, and have a right to be considered a better man than you, with better reasons for being proud.' (II, vi)

この二人の対決の場面から、Headstone は Wrayburn に対する殺意を抱くようになると思われるが、悪人であるはずの Headstone が、この場面では憐れに思えるほど、Wrayburn の攻撃は激しい。ここでは Dickens は二人の personalities を問題にしているのではなく、彼らの identities を重視しているのだと、Lucas が述べているが¹⁶⁾、Wrayburn の階級意識は一人の人間の殺意の一因ともなるくらい、相手を傷つけてしまうのである。

Headstone の一撃によって、Wrayburn は初めて死の一步手前という状態を経験し、'turn in earnest' となるというのは、何という皮肉であろうか。死ぬか生きられるかわからないときに、Lizzie と結婚しようと思いつくのも、彼らしい egocentric な行為である。これほど自己中心的な Wrayburn が Lizzie を通して、'[an object] worth being energetic about' を見つけ、'a mine of purpose and energy' をつかむこととなり、Twemlow の言う 'true gentleman' となるのであるが、ここでも、Dickens は道徳的な固定観念に振り回されてしまって、結論を急ぎすぎているように思われてならない。Houghton によると、gentleman であることは、自己を顧みない勇気と努力と忍耐力と共に、寛大さ、度量の大きさを持つことである¹⁷⁾。Twemlow の言うように、Wrayburn が true gentleman となったら、何が彼の中に残っているのだろうか。'a bad idle dog' であったときの、あの他人を蔑視する挑戦的な魅力も「改心」してなくなり、生まれつきの精神的 generosity もあるはずがないとしたら、蘇った Wrayburn は一体何を得たのだろうか。ただ父から与えられた身分としての gentleman の地位と金と、彼の軽蔑していた 'energy' があるに過ぎない。Dickens は多分、Wrayburn には true lady となった Lizzie と愛とが残っていると誇らしげに叫ぶであろう。しかし、それにしても Wrayburn の失ったものは大きい。彼は人間としての「自己」を失ったのであるから、Wrayburn の持っていた階級意識や生への執着は、道徳的な価値観では測ることのできないものである。またしても Dickens は価値の違う二つのものを一つの枠に入れようとしている。Riderhood が生と死の間を彷徨しても、'self' を棄てることができなかつたように、私には、Wrayburn の 'self' も死を乗り越えて、さまよい続けているような気がしてならないのである。

VII

前にも述べたように、Henry James は人間性を知るためには哲学者でなくてはいけないと言って Dickens を 'the greatest of superficial novelist' と評価した。たしかに Dickens は彼の人生観を哲学的な言葉によって読者に押しつけることはしないが、その代わりに断片的に人生の真実を描写することで読者に人生について考えるきっかけを与えているといえるだろう。作者の作り出した徳という堅固な枠組に囲まれて、人物たちの自己がそれぞれにその枠組の壁にぶつかっていく姿は決して単純なものではない。この点で、Barbara Hardy が Dickens の後期の小説について触れている言葉は的を得たものである。

Dickens's persistent experiment are marked by a limitation. He is apparently not trying to write whole novels of inner action, but inserting their inner analysis of complexity into his kind of novel, placing its subtlety under the spotlight that glares

れに思い出させる。しかし、Carton の ‘buried alive’ は、真剣な意味において生きていることが死につながるものであったが、Wrayburn の場合は、彼は自分の不満をそのような形でごまかしているのであって、決して死にとりつかれた激しいものではない。彼の人生に対するポーズとして、Carton と同様に怠惰な無気力な生活をしているのである。

Wrayburn はいつも自分の回りに謎 ‘riddle’ ‘conundrum’ をめぐらしている。

‘You know what I am, my dear Mortimer. You know how dreadfully susceptible I am to boredom. You know that when I became enough of a man to find myself an embodied conundrum, I bored myself to the last degree by trying to find out what I meant. You know that at length I gave it up, and declined to guess any more’ (II, xxiv)

この自らかけた謎のためにいっそう自分が解らなくなり、一世の中の他の人たちについてよりも、ずっと私は自分を知らない。| (‘I know less about myself than about most people in the world’) ことになるのである。Wrayburn が ‘I am in a ridiculous humour, ...I am a ridiculous fellow. Everything ridiculous’ と言うのは、Carton のような自己蔑視の言葉ではない。Wrayburn は決して自分を軽蔑することではなく、常に自尊心を持っている。自分を尊く思い、自分を信じているから、自分を ridiculous な状態にしておくことに耐えられるほど客観的に自己を見ることができるのである。彼が軽蔑しているのはいつも他人であり、それらがおりなす社会である。その他人と社会を軽蔑している故に、その中に存在していなくてはならない尊い自己を ‘buried alive’ させて、回りに ‘riddle’ をめぐらせて、外界から自分を傷つける相手が侵入してくるのを防ぐのである。なぜならば、Wrayburn にとって、‘self’ はそれほどに尊く、大事なものであるから。

Wrayburn は Jenny Wren の父親に金を与えれば、必ず酒を飲んでしまい死ぬことになるを知っているが、Lizzie の行き先を聞き出すために彼を買収する。彼にとって他人の生とか死とかいうものは、何の意味もないのである。誰に対してもどんな事にも ‘He was sorry, but his sympathy did not move his carelessness to do anything but feel sorry’ という以上に彼の心は動くことがない。Lizzie が困っているときでさえ、‘...It was not strong enough to impel him [Wrayburn] to sacrifice himself and spare her’ と述べられている。Hillis Miller はすべての人物の生活の質は、死に対する見方によって判断できると言っているが¹⁵⁾、Wrayburn の空しさは死を意識したためのものではなく、自己だけを考えているためのそれである。

Wrayburn のもつ空しさは、自分の人生が、生まれる前から父親によってすべて決められていたことに対する一種の反抗的ポーズに過ぎない。Steerforth が自分を導いてくれる父親がいたら、自分がこれほど重荷にはならなかつたらろうと、つぶやいたあの言葉の重みと、Wrayburn のすねた態度とは、どれほど大きなへだたりがあることだろう。

Wrayburn は、父の与えた金、職業、身分など、すべてに反抗的ポーズをとっているのに反して、実際は彼が寄りどころとしているのは、彼自身の本質的なものではなく、皮肉にも父親の残したそれらの外面的なものである。彼は Headstone を彼の生まれ故にかからかい、怒らせる。

‘You reproach me with my origin,’ said Bradley Headstone; ‘you cast insinuations at my bringing-up. But I tell you, sir, I have worked my way onward, out of both

諏訪間 裕子

A Tale of Two Cities が初め *Buried Alive* と呼ばれようとしていたことを考えてみると、Dickens の心の奥にはすでに死のテーマが潜在していたのであろう。この物語の背景となっているのが革命であることも、死をこの小説と切り離せない要素としている。‘In seasons of pestilence, some of us will have a secret attraction to the disease—a terrible passing inclination to die of it’ また、‘But indeed, at that time, putting to death was a recipe much in vogue with all trades and professions, and… Death is Nature’s remedy for all things’ とあるように、Carton にとっても他の人物たちにとっても、死の危機感に晒されていることは、即ち生きていることの確認でもあった。つまり、Carton は小説が始まったときから死を用意されていて、彼にとって死とは *mystery* ではなかったということである。この「死」にどんな美しい意味づけがされようとも、Carton は死ぬ運命にあったのである。むしろ、彼は最初から死ぬことを望んでいたのである。この小説はheroを最後に殺してしまうことによって‘cheerfully’に終るといふ人もいる¹¹⁾。この‘cheerfully’という印象は‘romantic tragedy’の幕切れの雰囲気とは相いれないものであるが、Carton にとって死は彼の一部であったことを考慮すれば、‘cheerfully’な死もうなづける。

John Gross はまた ‘his sacrifice [is] trifling, since he had nothing to live for’ と言ってもいるが¹²⁾、Carton の死にはどんな意味があるだろうか。Carton は死ぬための好機を得て、彼の死にたい心を満足させたのではなからうか。Dickens は、あまりにその行為を美化するので、Carton の持っていた生における死の内在という人間の直面せねばならぬ深く厳しいテーマを、cheerful なものにしてしまっている。Houghton は死の場面について次のように述べている。

The death scenes which fill the Victorian novels are clearly connected with the religious crisis. They are intended to help the reader sustain his faith by dissolving religious doubt in a solution of warm sentiment. When the heart is so strongly moved, the skeptical intellect is silenced.¹³⁾

Dickens は一個の人間の苦悶の結果として意味深いはずの Carton の死を、余りに詠嘆し過ぎたために、彼に内在していた ‘skeptical intellect’ までも無視してしまったのである。作者が個人的な死への憧れを美徳として称えようとしたために生じた矛盾である。美徳の裏には、自己をもて余し、死にとりつかれている人間の苦悩が隠されている。ここでも、主人公の人間としての苦しみが、作者のロマンティックな筆から遊離して、読者の心の中にわずかながらもその苦悩の痕跡を残していくのである。

VI

Our Mutual Friend の Eugene Wrayburn は Angus Wilson に ‘a redemption of Steerforth’ と言われるほどに¹⁴⁾、かつて Steerforth の示したダンディズムを受け継いでいる。Eugene は自分を ‘a bad idle dog’ と言いつつ、肉体的に生きていることを意識しているが、無気力な状態の中で ‘a trifling, wasted youth’ を過ごしている。Veneering の society に彼は出入りしているけれども、その中では自分を持たないばかりでなく、恐ろしいことに彼は「椅子の背に生きてまま埋められている」(‘buried alive in the back of his chair’) のである。この ‘buried alive’ という言葉は、Carton の生きていながら死にとりつかれた精神状態をわれわれ

You know I am incapable of all the higher and better flights of men.... At any rate you know me as a dissolute dog, who has never done any good, and never will. (II,x)

このような自虐的な Carton の自己蔑視に、Dickens は心から同情している。

Sadly, sadly, the sun rose; it rose upon no sadder sight than the man of good abilities and good emotions, incapable of their directed exercise, incapable of his own help and his own happiness, sensible of the blight on him, and resigning himself to let it eat him away. (II, v)

自らを落としめ、自らの不幸に涙にくれる Carton と共に、Dickens も悲嘆の涙を流している。しかし、Dickens の感傷はひたすら彼に同情するばかりで、Stryver のような俗悪な男と競争することに耐えられない Carton の感受性も、ずっと高いものに憧れる彼の理想家としての誇りも、認めようとしていない。Dickens は Carton を悲しい存在にするために夢中になってしまって、彼の持つもっとも高い本性に読者の関心をひく努力を怠っているのである。

V

Dickens の描く主人公たちは、よくすでに子供のころ死んだものとして描かれたり、死のイメージに囲まれていたりする。例えば、David は David の死んだ弟と自分を同一視しているし、Esther は ‘I had never, to my own mother’s knowledge, breathed—had been buried—had never endowed with life—had never born a name’ とあるように、生まれたときからすでに死んだものと母親に思われていた。Sydney Carton もまた同じような幻想を抱いている。‘I am like one who died young. All my life might have been’ とある。また Lucie と Darnay の死んだ子供は、幼くして死んだ Carton 自身であるように描かれている。前の二人 David と Esther の場合は、むしろ死のイメージは彼らのこれからの生活の上に肯定的意味を持ち、David が精進する意味を深めることになり、一方 Esther の場合でも彼女が他人のために献身的に奉仕することが、彼女の死のイメージを考え合わせてみることで、更に深く美しいものとなる。だが Carton の場合、彼にとりついて離れない死のイメージは、彼にとって肯定的な役割を果たしているだろうか。彼にまつわりつく死は、Carton 自身が生きる望みを失ってしまうほどに強い。‘...as to me, the greatest desire I have, is to forget that I belong to this terrestrial scheme’ と言っているし、Mr. Lorry には ‘I am not old, but my young way was never the way to age. Enough of me’ と語っている。彼にとりついた死は、彼をよりよき生活へと導くことはなく、‘It is too late for that. I shall never be better than I am. I shall sink lower, and be worse’ というように、彼を低く低く地の底へと、引き込むことになってしまう。

He walked by the stream, far from the houses, and in the light and warmth of the sun fell asleep on the bank. When he awoke and was afloat again, he lingered there yet a little longer, watching an eddy that turned and turned purposeless, until the stream absorbed it and carried it on to the sea. — ‘Like me’ (III, xi)

諏訪 裕子

が Jarndyce を Romantic benevolence の実行者として扱おうとすればする程、Jarndyce の人間性は eccentricity という異質のものとなって、その姿を表わそうとするのである。御伽の国では自然であった慈善そのものを持つ unjustness は、現実の社会にあっては人間の苦しみの根源ともなり得るのではなからうか。初期の benevolent people に向けたのと同じ眼で、われわれが Jarndyce を見ようとする、彼の人間としての苦悩は eccentric なものに映ってしまう。Jarndyce の示す ‘eccentric gentleness’ は決して単なる eccentricity ではなく、人間が善を人のために行なうと称しつつ、実はその底に秘めている自己保全欲の表現に他ならないのである。

IV

次に *A Tale of Two Cities* について考えてみることにしよう。この小説を K. J. Fielding は romantic tragedy であると評しているが⁹⁾、成功しているかどうかは別として、Dickens の作品の中でこの作品ほど正面からロマンティックな愛の主題にとり組んでいるものはないだろう。Dickens がどうしてこのような主題を扱おうとしたかという点については、種々の説があるが¹⁰⁾、私の関心の中心となるところは、主人公 Sydney Carton が愛のために自らの命を犠牲にしたことを Dickens がいかに扱っているかということである。誰もが読んですぐ解るように、Dickens は明らかに Carton の死を通して、愛のために命を絶つということが、人間の行為の中でどんなに美しく、勇気のいるものかを歌いあげている。Lucie に向かって Carton は次のように呼びかける。

For you, and for any dear to you, I would do anything. If my career were that better kind that there was any opportunity or capacity of sacrifice in it, I would embrace any sacrifice for you and for those dear to you. (II, xiii)

この言葉には一種の詩の響きがある。‘For you, and for any dear to you’ という呼びかけを二度繰り返しているところなど、われわれに詩の refrain を思い起させる。また、Carton が愛する Lucie の夫 Darnay のために身代わりとなって死刑台に立つとき、Dickens は Carton の死がキリストの死とその復活と同じ意味を持つことを読者に印象づけている。‘I am the resurrection and life, saith Lord; he that believeth in me, though he were dead, yet shall he live: and whosoever liveth and believeth in me, shall never die’ というキリストの言葉を、ちょうどテーマミュージックのごとく、Carton の死の場面の背景として繰り返している。Dickens が Carton の死をいかに神聖に扱い、美しくロマンティックな響きをそれに持たせようとしているか、その努力のほどがわかるであろう。さて、Dickens がこのように純化している愛のための犠牲は、本当に彼が示すような美しい、純粋なものであろうか。私が疑問に思うのはこの点である。その答えを得るためには、Carton 自身の言動に問いなおしてみる必要があるだろう。

Carton は才能があるにもかかわらず、常に懐疑的な眼で物を見ていて、自分にも他人にも満足することがない。そのために、彼は自分の能力を無理に浪費するようしむけている。そのことは彼が Stryver に利用され、自分では何の利益も得ず、身も心も砂漠のような状態で(‘waste forces within, and a desert all around’), Stryver の ‘jackal’ となって彼の社会的成功の助けをしていることでもわかる。

Esther を初め Richard も Charley も Caddy も Smallweed の子供たちも、みな子供時代を経ないで歪んだ成長をしている。Jarndyce は余りにも苦しい証拠を見過ぎていた。そのために、いつも変ることのない無邪気さ、子供の持つ無責任さを示しているかにみえる Skimpole の見せる幻影に、空しくしがみつかずにはいられないのである。Skimpole は善意について彼独特の解釈をしている。

‘It’s only you, the generous creatures, whom I envy……I envy you your power of doing what you do. It is what I should revel in, myself. I don’t feel any vulgar gratitude to you. I almost feel as if you ought to be grateful to me, for giving you the opportunity of enjoying the luxury of generosity. I know you like it. For anything I can tell, I may have come into the world expressly for the purpose of increasing your stock of happiness.’ (VI)

ここでも、Esther にコメントをつけさせることで、Dickens は Skimpole のこのような勝手な解釈を Skimpole 側の欠陥として扱い、それによってますます Jarndyce の善意に輝きを加えようと努めている。しかし、いくら一方的であっても、この言葉は Jarndyce が今まで示してきた eccentricity ゆえに、別の方向から Jarndyce を描き出す助けとなってしてしまうのである。Jarndyce のこのような ‘eccentric gentleness’ を Esther は十分に理解している。

It seemed to me, that Skimpole’s off-hand professions of childishness and carelessness were a great relief to my guardian, by contrast with such things, and were the more readily believed in; since, to find one perfectly undesigning and candid man, among many opposites, could not fail to give him pleasure. (XV)

Jarndyce のもう一人の友人が Boythorn であることを考えると、Jarndyce の子供らしさに求める ‘relief’ の不安定さが更に明確になってくる。Boythorn もまた、別の意味で子供の世界に住んでいるもう一人の大人である。Sir Leicester とのつまらぬ土地論争に自分のあるだけの力を使い、すべての物事を大袈裟に考える。子供の持つ無責任さを大人の世界にまで持ち続けている点では、Skimpole と同類であろう。これら Jarndyce の二人の友人は、全く対照的な方法で大人の世界から逃避している。そして Jarndyce もまた自ら味わい得なかった子供の姿を、これら二人の歪んだ像の中に求めているのではなからうか。Jarndyce は浪漫派の詩人たちのように子供時代に戻ること、人生を乗り越え、感情の貧しさも絶望も孤独をも克服することができるという、かすかな希望を持っている。しかし、皮肉にもその対象として、偽りのねじ曲ったイメージを選んだのである。Angus Wilson の言うように、Dickens は、‘second childhood is not the same as being a child’⁷⁸⁾ ということを告げているかのごとくである。

Richard の死の床で Jarndyce は、「黒雲は晴れた。私たちはみな多かれ少なかれ盲目だったのだ」と語る。そしてその後で、‘What am I but another dreamer’ と結んでいるが、Jarndyce もやはり Richard と同様に、空しい幻想に囚われていた弱い人間であった。彼の慈悲はかつての benevolent gentlemen のように万能ではない。彼らとは異なった土台に立っている、生きた人間の善を Jarndyce は示している。彼の持つ eccentricity は、人間が本来対等であるべき相手に対して慈悲をかけることによって生じる矛盾と苦しみを表わしている。それ故に、Dickens

諏訪 裕子

すでに Jarndyce 自身も認めているように、訴訟の渦に巻き込まれまいとする努力のために、何度南風が東風に変ったか知れない。彼は多くの孤児をひきとって育てたり、金銭的な援助をしているが、それでもなお東風は吹き続ける。人を助けるための努力は惜しまないが、自分の持っている善意が外界の悪によって損われることを Jarndyce は恐れているからである。Jarndyce は訴訟という現実の悪から自分を守ることができたが、その戦いの間にそれ以外の悪に立ち向かう気力を失い、自身をも奇人にしてしまった。Jarndyce は Lauriat Lane の言うように、‘armor armored virtue’⁶⁾ によって外界の悪と戦ったのである。しかし、徳とは本来、防備されねばならないものであろうか。その矛盾が彼の性格の *eccentricity* となって表われ、作者の抱くロマンティックな期待と相いれない要素として、読者の心に残るのである。

III

Jarndyce という人物を考えると、Skimpole に対する彼の評価が問題となる。Skimpole は「歳月、苦勞、経験という普通の道を経て人生を歩んできた人とは、態度や風采が全く違う人間」である。金と時間の観念を持たず、寄生虫のように Jarndyce に依存し、芸術家としても父親としても夫としても責任感のひとかけらもない男——この Skimpole を Jarndyce は善意を持って受け入れ、そのみか彼のあらゆる面倒をみている。Jarndyce のこの態度を批評家は善は悪の巧みさに騙され易いからだとか、Chancery の世界の悪が善人の眼を曇らせたのだとかいう判断を下してきた。しかし、私はここにも Jarndyce の示す *eccentric* な一面が見られるように思う。Jarndyce は Esther に、「この世の中で最もすばらしい人間——子供」として Skimpole を紹介する。

‘There’s no one here but the finest creature upon earth——a child. I don’t mean literally a child, …not a child in years. He is grown up——he is at least as old as I am——but in simplicity, and freshness, and enthusiasm, and a fine guileness inaptitude for all worldly affairs, he is a perfect child.’ (VI)

Jarndyce の子供に対する執着は異常なほどである。Richard の過ちに対しては、常に傍観者としての良識を失わなかった Jarndyce が、Skimpole に対しては我を忘れた一種の憧れのようなものを抱いている。Jarndyce の上に挙げたような描写の中に、私はかつての Pickwick や Cheeryble などの ‘Good Rich Man’ のもっていた子供らしさを思い出さずにはいられない。Skimpole の「子供らしさ」は、かつての Good Rich Man の歪んだ姿、——歪んだ鏡に映してはいるが、Jarndyce の過去の姿——の象徴となっているように思われる。そして、彼のみならず彼の回りにいる孤児たち、Esther や Richard や Charley など子供であることをすでに放棄している子供たちによって置き去られた子供時代が、Skimpole の奇形の幼稚さの中に象徴されているようだ。

Jarndyce の回りにいる子供たちは子供時代を持たない。Q. D. Leavis が述べているように、*Bleak House* の世界では、皮肉にも Skimpole 以外に子供らしい子供は生まれないのである。

…He [Skimpole] is thus, with his mock-innocence, a pseudo-child, yet in so far as he is a child at all, the only one in the novel.⁷⁾

the pretence to account for any dissatisfaction he could not conceal, rather than he would blame the real cause of it, or disparage or depreciate any one. We thought this very characteristic of his eccentric gentleness....(VI)

このような Jarndyce の態度は、一方から言えば自己中心的で消極的なものである。大らかで子供のような無邪気さを持った⁵⁾かつての Good Rich Men とは雰囲気が異っている。あらゆる人間を何世代にも渡って、次から次へと果てしなく飲み込んで減ぼしていく、Jarndyce and Jarndyce の訴訟の中心人物であるならば、その影響を受けて Jarndyce が本来の善意を十分に発揮できないのは当然である。また Dickens 自身 *Bleak House* を書く頃になると、個人の善意が社会の悪に対する万能薬であるという自信を失ってきたということもよく知られる解釈である。しかし、この Jarndyce の eccentricity は、人物が作者の持つあいまいなロマンティズムに対して行った、ささやかではあるがしつかりとした人間宣言ではないだろうか。

訴訟の渦中に巻き込まれて、次第に自分を失い性格が損われていき、遂に身を減ぼしてしまう青年 Richard は、なぜ Jarndyce だけが訴訟のために性格が変わったりしないのかと Esther に尋ねる。

‘If I [Richard] have the misfortune to be under that influence, so has he [Jarndyce]. If it [the suit] has a little twisted me, it may have a little twisted him, too....It taints everybody. You have heard him say so fifty times. Then why should he escape?’ (XXXVII)

これに対して Esther は Jarndyce は「並みなみならぬ性格の持ち主で、断固としてその渦中に巻き込まれまいとしているからだ」(‘...his is uncommon character, and he has resolutely kept himself outside the circle’) と答えている。またその後で Richard は次のように Jarndyce を批判している。

‘I am not sure, my dear girl, but that it may be wise and specious to preserve that outward indifference. It may cause some other parties interested to become lax about their interests; and people may die off, and points may drag themselves out of memory, and many things may smoothly happen that are convenient enough,’ (XXXVII)

上のような Richard の Jarndyce への非難に対して Esther は、「Richard の過ちに対する Jarndyce の優しさ」(my guardian’s gentleness toward his errors) を思い出してかえって Richard の誤った解釈を憐れむのである。この Esther の注釈は完全に Richard が誤っていて、Jarndyce はあくまでも立派で純粋であるという Dickens の見方を裏づけている。Dickens の善へのロマンティックな信頼が Esther にこのような道徳的なコメントをさせたのであろう。ここでも、Esther の弁護によって Jarndyce は再びかつての Good Rich Men の持つ超人的な力を取り戻したかに見えるが、Dickens の努力も空しく、Jarndyce はすでに eccentric な人間であって、彼の人間性はますます Dickens の与えた美徳の権化としての枠組を外そうともがいているのである。

諏訪問 裕子

Sydney Carton の犠牲的行為, それに *Our Mutual Friend* の Eugene Wrayburn のもつロマンティズムを例に挙げて, 作者の道德観とそれを打ち破ろうとするこれらの人物たちの持つ自己との葛藤を解明してみたいのである。

II

Jarndyce はいわゆる Dickens の描く 'the Good Rich Man' とされる²⁾人物たち, Pickwick から始まり, Brownlow, Cheeryble 兄弟, 老 Chuzzlewit, Scrooge などの跡を継いで登場した慈善家である。一般に Dickens の描くこのような慈悲深い人々は, 何の思想も持たないでただ親切以外にすることがないから人に善を施す, いわば神のような存在である。Humphry House によれば, Dickens は人間の親切心の最も共通した点や純粋なものを取り出してこれらの慈善家たちの中に強調しているのだという³⁾。このような Dickens の benevolence を Walter Houghton は Romantic benevolence であると言い, それまでの宗教的義務感を伴った benevolence と比較して, 次のように説明している。

Dickens often speaks of it [benevolence] in Christian terms, but Christian benevolence, based on a will dedicated to the service of God, is quite another thing. In Christian thought acts of charity are not the spontaneous expression of a good heart, but performances of religious duty.... That Dickens could identify this Romantic benevolence with Christian benevolence marks the decline of the older and sterner faith on which the latter had been based.⁴⁾

確かに Jarndyce 以前の慈善家たちのものには「ロマンティックな慈悲心」という言葉が当てはまる。彼らの善意は人物の持つ善意ではなく, むしろ作者自身が人物に示した善意であった。Dickens のロマンティックな心を満たす手段として, 御伽の国の魔法使いのような 'Good Rich Men' が使われただけのことである。しかし, Jarndyce に至っては, 単に Romantic benevolence で片づけられない点が多い。今までの benevolent people に比べて, Jarndyce の善意には矛盾や不可解な点が見られる。この不可解さはロマンティックな御伽の世界の持つ不可解さではなく, Jarndyce の善意が現実的な矛盾に満ちているために感じられるものなのである。Jarndyce は, 以前の慈善家たちと違って, 自我を持たない無色の人間ではないし, 慈善以外にすることのない神々しい存在でもない。彼は現実の自分と自分に身近な者の不幸を忘れるために善を行うという, ある意味では自己を棄て切れない弱い人間である。その点では Jarndyce 以前の Good Rich Men の善と Jarndyce の善とは, 根本的に異質のものであろう。確かに, Dickens はロマンティックな慈悲心を Jarndyce の心の中にも求めているように見える。しかし, 実際に描かれた Jarndyce の benevolence は, それを裏切るような 'eccentric gentleness' である。

Jarndyce には東風が吹くと 'Growlery' と呼ぶ自分の部屋に閉じ籠もってしまう癖がある。何か能力に及ばないこと, 悲しいことが起こったり, 耐えられない事実を見せられたりすると, Jarndyce は東風に事寄せて自分の失望を知らせるのである。Esther は Jarndyce の東風を次のように解釈している。

Ada and I agreed...that this caprice about the wind was a fiction; and that he used

徳の裏面

Dickens 後期の小説の三人物の考察

諏訪間 裕子

I

Dickens の作品を批評するとき、誰もが口を揃えて言うことは、Dickens は moralist であると言うことのように思われる。確かにどの作品を読んでみても、彼の作品には必ず道徳的要素が織りこまれている。あるときは、われわれもその教えについつりこまれてしまって、身のひきしまる思いをすることもあるが、大抵は余りに単純で機械的であるために多分に苛立ちを感じてしまう。Dickens が19世紀の作家で、当時の moral に敏感で、時代を反映した価値判断を下したのは当然のことであろう。しかし、われわれ20世紀の人間の眼で彼の小説を読むと、いくら Dickens が19世紀の厳格な道徳観によって育かれた作家だと思ってみても、彼と大体同時代の作家 Henry James でさえ評したように、余りに superficial な感じを持たざるを得ない。Dickens は人間の内にある美しいもの——善意、無邪気さ、愛、献身、犠牲など——に子供のよ様な憧れを持ち続けていた。そしてその美を損ねるものに対しては、容赦なく糾弾の鞭をふるっている。そのため多くの人物は死をもって罰せられるし、地獄の苦しみを味わわせられるはめになる。彼のこのような美に対する憧れは、純粹で美しいし、一貫性があり、念が入っているので、読んでいる側の反論を受け付けられないような断固とした雰囲気さえ伴っている。そして大抵の場合、われわれも Dickens の自己陶醉とも思えるような美意識や自信に満ちた結論を、半ば諦めの気持で認めざるを得ない。そしてそのひどさに耐えられなくなっても、せいぜいそれが彼の limitation であると言ってけちをつけることぐらいしかできないのが常である。

しかし、ここで読者が苛立ち諦めることをやめて、もう一度彼の作品を読んでみると、Dickens は道徳的結論やロマンティックな要素を強調してはいるが、その反面では現実的な人間の精神の動きをも、人物の中に二重写しにしていることがわかるであろう。Dickens が果たしてその裏に潜む「何か」を意識して描こうとしたか、あるいは彼が書こうと意識せずに自然に滲み出てきたものか、そのことについては今ここでは論じないことにするが、人物たちの持つロマンティックなもの、小説の持つ道徳的価値判断は、単に作者の信念や好みの問題ではなく、人物たちが現実の苦しみ、内心の葛藤などから逃れるための逃げ道であったり、美的行為に託して何とか生き延びていこうとする、あるときには凄まじいほどに醜い、人間の自己保全への欲求であるように私には思えるのである。だが、ロマンティックな要素に対する作者の道徳的共感が余りに強いので、それらの裏に隠されている、美しくなどない厳しい人物の姿にのみ高い評価を下してしまうのも、また作品の正しい解釈とはならないだろう。そこで本論では、作者の道徳観や美意識と矛盾した人物たちの「自己」が、作者の作り出す枠組から抜け出そうと戦っている姿に注目したい。そのために、*Bleak House* の John Jarndyce の慈善と *A Tale of Two Cities* の